

PHJの海外4か国活動サイトを視察して

PHJ代表 廣見 公正

昨年の8月に代表に就任後、はじめて3月24日～4月9日にかけて全海外事務所及び各々の活動地を視察し、現場・現物・現実を自分の目で把握しました。訪問順別に報告します。

カンボジア

保健行政区が主体となって保健センターを主導できるような支援を重点に!

コンボンチャム州の保健局、州病院を訪問し、PHJの支援活動に対する深い感謝と今後も全面的にサポートするとの力強いコメントをいただきました。州病院は立派な建物や設備があり人材も豊富、また廊下まで患者が溢れているほど活況でした。一方、事務所から車で悪路を1～2時間の3つの支援している保健センターは水道、電気がなく、建物、設備、器材も古く、病院との大きなギャップがあります。メンテナンス等のフォローを行って、一次医療をキッチンと機能継続させることが



清掃活動をする小学生たち

大変重要であることを実感いたしました。保健センター周辺のクリーンデイに来ていた小学生達の屈託のない可愛い笑顔に感動しました。

タイ

全ての支援活動が着実に現地に根付き始めている!

HIV/エイズ予防教育を実施している高等専門学校2校を訪問し、ピア教育ルーム見学時に担当教師から、本事業は大成功、今後もHIV/エイズ予防教育は学生にとって大切であり、自分たちで次世代ピアエデュケーター育成を継続することを宣言されました。チェンマイ大学病院での小児心臓病手術は、250～300件/年、3名の医師が手術可能。他病院でも簡単な心臓病外科手術ができるようになり、更に難しい手術をチェンマイ大学病院が実施することになるそうです。RICD(ラジャナガリン子供発達支援センター)は大変立派で近代的な施設で、PHJが支援したラーニングセンター(ドラえもんルーム)も好評。サンサイ病院訪問後、

貧しい長屋の一室に住んでいるパートナー患者の家を訪問しました。重い症状の3歳児と母親を見ているのは辛かったです。



RICDのラーニングセンター

ミャンマー

厳しい規制を一つ一つクリアし、盤石な事業立上げを!

ネピドーのタツコン郡のタツコン病院、地域保健センターを訪問、サブセンター建設候補地を視察した折には、その



地域保健センター訪問

更地に村のお坊さんの出迎えや村人達も参集してきて、皆さんの切なる願望を感じました。他地域にあるほぼ完成したサブセンターを見学、提示された設計図通りの2棟造りでした。建設費は以前よりかなり跳ね上がっているようです。予定していた救急車のヤンゴン港への到着が10日ほど遅れ、寄贈式等は延期。また現地スタッフ採用活動を開始し、一部の面接に参加しました。

インドネシア

現地に根付いた活動へ、衛生環境改善に挑戦!

ティルトヤサ自治区の、村人対象菜園教室と助産設備付診療所(3ヶ所)を見学しました。菜園教室ではベテラン菜園講師と村人達の楽しい雰囲気や、収穫する村人達の明るい笑顔は心なみしました。保健省の国際協力局長さんの「NGO活動として望ましいのは知識移転である。村のエンパワーメントへの取組みは重要であり、密接な協力関係を築いてほしい」とのコメントは大変印象的でした。

村をちょっと歩いてみるだけで、決して綺麗ではない川で水浴び、炊事、洗濯、用足し場面や、散乱したゴミをたくさん目にします。PHJとして「衛生環境改善」事業を開始いたします。教育と意識改革から地道な草の根活動を始動します。



炊事、洗濯、排せつに使われている川

全拠点を回ったことで、現在の実績は、ここまでPHJの現地に根付いた活動を導き築いて下さった先陣の諸先輩方々のご努力と、皆様の心暖まる継続したご支援の賜物と痛感し、深く感謝しております。新所長・新拠点・新事業ばかりの正念場ですが、全員一丸となってこれを乗り越えて新たな展開を目指して邁進いたします。

北里大学看護学部准教授 吉野 八重

2月半ばに約1週間、PHJ事業の視察機会を与えられました。農村地域の保健センターの機能強化のための提案、准助産師の卒後研修計画策定ワークショップでの講演、研修カリキュラムの精査を行うことがミッションでした。虐殺の歴史の影響が色濃く残るカンボジアは東南アジアの中でも妊産婦死亡率、新生児死亡率が最も高い国の一つです。開発途上国の助産師の能力強化は母子の死亡率を減らし障がいや予防する上で最も有効であるため、グローバルヘルスのアジェンダの中でも最重要課題となっています。

貧しい農村地域の医療人材不足を補うために開始された准助産師養成課程は高卒後1年間と短く(日本では4年、または6年間)、修了後に研修期間もないまま、僻地の保健センターに派遣されています。若い准助産師たちは相談相手となる医師や経験豊富な助産師もなく、参考文献もなく、卒後継続教育や情報交換などの機会もなく、緊急時の対応に関する知識や技術の不足への不安が非常に強いようでした。村の保健センターは医療機材の老朽化や医薬品不



准助産師の研修

足、アクセスの悪さ、助産師の能力不足などの理由で本来の機能を果たせず、その結果、出産が都市の大病院に集中し、病室に収容できない母子は病院玄関先のベッドやゴザの



妊婦さんの検診

上で、プライバシーも安全もない中、寝かされていました。貧しい農村地域の母子たちや准助産師たちは、改革力も発言する声も持たない弱い存在です。クメール語のハードルも大きく彼らの代弁者、伴走者として活動することは容易ではないと思いますが、PHJの強みを生かし、村人や准助産師の言葉に耳を傾け、教育システムの整備、医療機器や医薬品の供与、上下水・電気などのインフラ整備支援などによって、持続的な発展が実現できると思います。

ワークショップでは州政府関係者から、PHJの事業目標への共感、期待、カンボジア現地事務所長として明るい笑顔で皆を力強く率いる市原和子さんや、現地スタッフたちへの信頼を感じました。教育には非常に多くの時間を有します。私も微力ながら、事業の支援に関わっていくことができたら大変幸いです。

滋賀医科大学国際保健・地域医療研究会 TukTuk 副部長・スタディーツアーリーダー 医学科4年 橋場 奈月

滋賀医科大学国際保健・地域医療研究会のメンバーである医学生7名、看護学生2名で、3月24日にPHJ活動サイトで菜園クラス、母子保健(MCH)クラス、地域診療所(Puskesmas)を訪問させていただきました。医学を学んでいる中でインドネシアでの医療や健康に関心を持ち、実際に日本の方がどのような活動をされているのか学び、将来の道標としたいと思い、PHJに受け入れをお願いいたしました。

菜園クラスでは、講師の先生のお話を多くの住民の方々が熱心に聞いており、活発な質疑応答が交わされていたのが印象的でした。終了後にはスタッフの方が参加者の感想を聞き取り、住民の方々のニーズを引き出そうとしている姿も見られました。

村の集会場で行われていたMCHクラスは、助産師の方々が家族計画についてワークショップを行っていました。集まった妊婦さんやお母さん方が積極的に参加しており、その活発さに驚いたのを覚えています。ワークショップの後には検診も行われており、MCHクラスの果たす役割の大きさを実感した場でした。検診待ちの間には妊婦さんの



MCHクラスで妊婦さんをインタビューしている様子

インタビューもさせていただき、インドネシアの妊婦さんの生の声を聴くことができ、大変貴重な体験をさせていただきました。そして、菜園クラスやMCHクラスのように実際に住民がクラスに参加し、専門家から直接助言をもらう機会の重要性に改めて気付くことができました。



Puskesmasでの集合写真

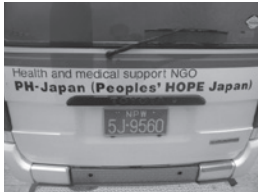
最後に、Puskesmasを訪問いたしました。診療所の所長さんに地域の問題やPuskesmasの取り組みの説明、施設内の案内をしていただき、限られた医療資源の中での医療の一端に触れることができました。

PHJのおかげで、今まで知らなかった世界を見、村レベルで医療がどのように機能しているのかを肌で感じる事ができ、とても刺激的な1日となりました。そして、医療従事者として、インドネシアで見つけた良い点を日本の医療にも活かすことができないか、どのようにして国際保健に関わっていけばいいかということを考える重要なきっかけとなりました。このような機会を与えてくださったPHJの皆様へ心からの感謝を申し上げます。

PHJ ミャンマー事務所では、2015年3月の事務所開設から、活動対象地区であるタッコン郡の母子保健環境の向上を目指して、活動を行ってきました。事務所開設以降、活動目標の一つである搬送システムの強化を目標として、寄贈用救急車の輸送手配を行いました。この救急車は、上益城消防組合様（熊本県）がアステラス製薬株式会社様から寄贈を受けて使用してきたものをPHJが譲り受け、ミャンマーへ寄贈した経緯があります。



タッコン郡病院が使用する救急車



ナンバープレートが付きまして

日本からミャンマーへの輸送は船便を利用し、3月初旬に博多港を出発しました。積替えの為の接続による遅れ等もあり、4月1日にヤンゴンに到着しました。到着後の受け入れには、通関業者との調整、政府からの輸入承認書や税関への必要書類の手配などに時間がかかりました。寄贈品を日本から送り、現地で受取り、

寄贈先まで届けることの大変さを実感することになりました。

救急車の通関が完了した後は、車体への保健省のロゴと文字入れ、車体のメンテナンス、酸素ボンベの手配等を終



保健局のスタッフとPHJスタッフ (右から二人目)

え、5月初旬に救急車がネピドーに到着し、5月15日に保健省へ救急車を届けることができました。保健省では、ナンバープレート手配、車体の検査等を行い、現在保健省内で車両の登録を行っており、7月にネピドーにて寄贈式を開催する予定となっています。

今回の救急車の寄贈手配を通して、一つの寄贈品を対象国に届けることの大変さを実感しました。今後は、受け入れ先であるタッコン郡保健局との協力体制を築きながら、寄贈された救急車の利用により、プロジェクト対象地域のサブセンター（農村地域の助産施設）、地域保健センター、タッコン郡病院において、緊急搬送に対応できる仕組み作りを目指していきたいと思ひます。

ミャンマー事務所長 真貝 祐一

PHJ タイ事務所では、2013年より横河商事株式会社様のご支援のもと、現地ベトナム・ウィメンズ・ユニオン（以下VWU）と協同で乳がん検診推進事業を実施しています。自己触診の研修を実施することにより、乳がんに関する知識を高め、また早期発見を促すことを目的としています。

活動の流れとしては、まず初めにタイ事務所長が講師となり、VWUや各県のウィメンズ・ユニオン（WU）のスタッフに対するトレーナー養成研修を実施します。その後、研修を受けた各県のWUのスタッフが地域に戻り、女性住民に自己触診方法を伝えていきます。自己触診で異常が見つかった女性に関しては、医療機関を紹介し、精密検査と治療を受けるよう促しています。

2013年1月～12月の初年度は事業目標（対象地域5省、対象女性3,500名）を上回る3,794名に対し研修を実施しました。



サンプルを使って自己触診法を習得

2年目となる2014年には、1年目と異なる5省（ハイ・フォン市、ハ・ナム省、タイ・グエン省、フン・イエン省、ナム・ディン省）10県にてトレーナーの養成研修を実施し、彼女たち

が各々の管轄地域の女性向けに研修を実施しました。研修の回数は合計107回、参加女性は6,113名となりました。

そのうち16名にしこりが見つかり、精密検査と治療を受けました。その結果、6名が乳がんと診断され、さらなる治療を受けています。



自己触診研修

この乳がん触診研修は、VWUのコミュニティレベルでの定例活動に組み込まれていることが確認されています。単年度の活動として終わるのではなく、支援事業終了後も、地域のWUが活動を継続していくことが期待されます。

また、2年目の最後となる12月には、本事業をさらに省レベルでのWUの活動に統合させることを目的に、保健省と合同で「乳がんの知識を広めよう」というコンテストを行いました。5省の対象地区に加え、ハノイ市、ホア・ビン省、ハイ・デュオン省から代表者40名が参加しました。



「乳がんの知識を広めよう」というコンテスト

3年目となる2015年は、5省内の対象地域を変え、5,000名の女性に対し研修を実施しています。

タイ事務所長 ジラナン・モンコンディー

HOPE パートナー会員と子供の交流

障がい児 / 慢性疾患児支援事業 (HOPE パートナー事業) は 1997 年に開始し、約 18 年間実施しています。タイから遠く離れた日本のパートナー会員様から患者の子供たちにご支援を頂き、治療を含め様々な活動を行っています。

また、ご支援だけでなく子供たちや家族を気遣うお手紙を送って下さったり、その手紙に子供たちが返事や絵を書いたり、会員様と子供たちの間に温かな交流が生まれています。今日はその中から、フロックと岡田芳江さんの交流をご紹介しますと思います。

フロックは生後すぐに脳性麻痺と診断され、治療を続けている 14 才の男の子です。岡田さんはご主人の幹雄さんが長年にわたってご支援を下さり、ご主人が亡くなられた後もご支援を引き継ぎ、折に触れてフロックや家族に対して心温まるお手紙や贈り物を届けて下さっています。遠く離れた日本から届く贈り物は、フロックの家族だけではなく、近所の子供たちにとってもめずらしく、一緒になって喜んで遊んでいるようです。



岡田さんご夫妻の写真

父親から岡田さんへのお礼の手紙にはこんなことが

書かれていました。

「先日、日本のおもちゃ (剣玉、紙風船、お手玉) と金平糖が届きました。紙風船はフロックと弟がどちらが先に破裂させられるかという遊びに夢中になり、剣玉は近所の子供たちが集まって遊んでいます。ゲーム機から子供たちが遠ざかるのでとても喜んでます！それから金平糖は、色とりどりであまりに綺麗だったので、勿体なくて家族は誰も食べようとしませんでした。そこで私が試しに一つ食べてみたのですが、とても美味しく、それを家族に伝えたところ、あっという間にすべて無くなってしまいました。」



剣玉、紙風船などを持つフロックと父親

ご主人が生前に送って下さったご夫婦や電車のお写真は、家族が一番よく使う部屋の壁に貼ってあります。文化や言語も違い、約 4,000 キロ離れた場所に暮らしている岡田さんの事を、フロックたちはまるで家族のようにその存在を近くに感じているようです。両親はフロックによくこんな言葉をかけるそうです。

「日本のお母さん」に誇りに思ってもらえるように、勉強もリハビリも一生懸命頑張るのよ！！」

タイ事務所 スティダ・チャンタマナス

東日本大震災復興支援 (石巻の近況)

石巻湾に面していた石巻市立病院は 3.11 の大津波で跡形もなく流され、来年夏を目指して現在石巻駅前建設中です。PHJ は同病院開成仮診療所に 2012 年 12 月医療機器を搭載したドクターカー 1 台を寄贈し、今年 3 月には隣接した包括ケアセンターにも軽自動車 1 台を追加寄贈しました。診療所は震災後、長 (ちょう) 医師 (所長) お一人でしたが今は若手の医師や看護師さんも増えて診療所の機能は順調に回復しております。医師の方々は午前中は病院で診療のあと、午後はドクターカーで病院まで来れないお年寄りや足の不自由な患者さんの訪問診療です。

震災から 4 年、今大きな問題になっているのは仮設住宅や被災した自宅で一人住まいの高齢者にストレス



寄贈したドクターカー (左) と軽自動車



ボランティア仲間たち

が原因と思われる認知症、うつ、アル中等が増えているとのことです。ブルドーザーが行きかう復興建設現場では最近材料不足や作業員確保の難しさから工事の遅れが目立ち始め、公営住宅の完成や引っ越しの時期も見えない地域があり、狭い仮設住宅でお住まいの方々のご苦労はいかばかりかと現地を訪れるたびに胸が痛みます。PHJ は総合的健康づくりに取り組んでいる石巻市立病院包括ケアセンターで必要とするリハビリ器具類がこれからの支援になるかと思っています。石巻支援は篤志家様から 5 年間の義援金をお預かりしており、これからもドナー様へ年 2 回の活動報告をしながら支援を続けて行きます。

また PHJ 有志 4 名で横河電機 OB の方々や学生たちのボランティア仲間と 5/8~5/10 石巻・女川の漁師さん一家の手伝いをしてきました。作業はほたて養殖に使うかき殻の選別と殻に糸を通すという一日半の簡単な作業でした。しかし作業しながらご家族から大震災発生時の壮絶な状況やまた漁業再開への並々ならぬ苦労を直接聞いたことは大変貴重な体験となりました。一日も早い完全復興を心から願っております。

東京事務所 横尾 勝

お知らせ

*ホープジャパンニュースを郵送でなく、PDF でお受け取りになりたい方は info@ph-japan.org までお申し込みください。次号よりメールに添付してお送りいたします。